■　同級生だった彼女の母　■

スタート

　水元晴彦が、中島奈緒美と再会したのは偶然だった。
　偶然の出会いは facebook で、たまたま憬れの女の子であった中島一美のことを話題にしていたからだ。
　一美とは学生時代の同級生で、今ではタレントをやっている。

　それをフェスブックに色々な話題として載せていて、晴彦のことがわかったようだ。
　タレントをやっている一美のファンサイト繋がりだ。
　なんどか一美の家には友達と一緒に遊びに行ったことがある。
　その時、話した記憶がある。
　一美は美少女だっただけに、その母親も綺麗な人だったと晴彦は書いていた。
　そこへ一通のメール――。

　それから何度もメールのやりとりがあって、実際にあって話すことにした。
　メールでは近況を伝えあって、奈緒美は最近の一美の生活などを教えてくれた。
　一美の家に行ったときも、母親の奈緒美とは良く話しをした。
　近況は知らなかったし、なにか新鮮な気分もあった。
　一美ではなく、母親の奈緒美とあうのだから。
　晴彦は時の経過を感じていた。

　会う約束をしたのは、ファミリーレストランだった。
　晴彦は先にきて待っていた。
　もしかして分からないかも知れないと思っていた。
　だが、タクシーに乗ってやってきた奈緒美はすぐに分かった。
　さすがに一美の母親だけはある。
　芸能人ではないが、そういう華やかな雰囲気を持っている女性だった。

「かわっていないですね。お久しぶりです」

「ハル君もかわってないわよ。すぐに分かったもの……」

晴彦は、その頃ハルと呼ばれていた。
何でも屋というか、便利屋的なポジションだった。
だから遊びに行っても、奈緒美の手伝いのようなことをすることが多かった。
そういう役回りを自分からかってでなければ、一美と親しくできなかった。
それも手伝って奈緒美とは良く話しをすることがあった。

「本当に、久しぶりですね。一美ちゃんもずいぶんと遠くの人になってしまって…。でも、もともと芸能関係のことが好きでしたよね」

奈緒美との話は弾んだ。
話し相手がいなかったせいか、奈緒美の話は終わらなかった。
一美の近況から始まり、込み入った話題にまで話しは広がった。

晴彦が口を挟める余裕がなかったほどだ。
だがイヤではなかった。
学生の頃とは違って、年上の人妻にも魅力を感じるようになっていた。

童貞だったときのように、ただ可愛い女の子に憧れているだけではなくなっていた。

女の色気というか、そういう人妻の色香も良いと思えるようになっていた。
そういう意味では、奈緒美はぴったりだった。
美少女だった一美は母親似である。
さすがと思わせる容姿をしていた。
学生の頃よりも魅力は増している。

「そうなのよ。今はね、一人なの……。高雄は時々帰ってくるんだけどクラブとアルバイトで忙しくて、あまり家にいないのよ……」

一美には弟が一人いる。
すでに芸能事務所から誘いがあるようだ。
それもあって、割の良いアルバイトをしているらしく家を空けることも多いと話す。
顔が良いとこうも違うものかと、自分の学生時代を思い出していた。
忙しくて嫌なアルバイトしかしたことがなかったからだ。
学生ではなくてからそれほど時間が経っていない。
つい昨日のような感じがした。

「――それで、ね。オバサン、離婚しちゃたんだ――」

「――えっ――？」

不意をつくような言葉だった。
夫婦のこと、奈緒美のプライベートなことは聞きにくいし、聞くつもりもなかった。
そこへいきなりの情報だ。

少しショックも受けた。
一美の父親は、いくつか料理店を経営していたはずだ。
なにがあったというのいうか……。

「愕きましたよ。そんなことがあったなんて―――」

理由はご主人――一美の父親の浮気もあるようだった。
だが、それだけではないことは口ぶりからしてなとなく分かる。
晴彦は立ち入っては聞かなかった。

「ハル君、今度の休みにデートしない。家にいても愉しくないのよ、誰もいないしね。遊びに連れいってほしいな～――」

「良いんですか、ぼくで……！」

「もちろんよ。デートしましょう。わたしを一美のかわりだと思ってくれいいから。……女は、時々弾けたいときがあるのよ……」

不倫を匂わすような口ぶりだった。
態度からもそれが分かる。
晴彦は承知した。
いやではなかった。
再会した奈緒美は、一美の母親とは思えなくなっていたからだ。

■選択
・1 のデートしないへ移動。
・2 のデートするへ移動。

1 ――デートしない 。

晴彦は、都合が悪いと断った。
昔の憬れの女の子の母親であるというのが、やはり心に引っかかっている。

年上の女――。
確かに、魅力的な女性だった。
だが、二人きりで、それもデートというのはやりにくかった。
一人の女として接するのが躊躇われた。

■選択。
・スタートへ戻る。

2 デートする。

晴彦は承知した。
なんとなく気持ちが高まってしまった。
学生の頃にはそういう風には見ていなかったが、一人の女生として見ても奈緒美は魅力的だった。
もともと実年齢も若く見える女性で、同級生の間でも美人と評判だった。

社会人になって再会しても、やはり容姿に衰えはなかった。
むしろ以前よりも若く見える。
芸能人ではないが、芸能人に見えるような華やかな雰囲気がある女性だった。
再会した奈緒美はまさに年上の女だった。
不倫の臭いをさせるような、そんな誘われ方でもあった。
そこでどこへ行きたいのかと、聞いて見た。
やはり年齢が違うので、同じ年のようなデートコースというわけにはいかないと考えたからだ。

奈緒美はとにかく外へ出たいといった。
遠くへ連れて行って欲しいということだった。
そこで晴彦は考えた。
一つは大型のテーマパーク。
これはデートだけではなく、家族でも同性同士ても楽しめる。
もう一つは簡単にドライブだった。
これもあまり年齢に関係がない。

―――。

■選択。
・3 のテーマパークへ移動。
・4 のドライブへ移動。

3 テーマパーク。

奈緒美が、なにか弾けられるところへ行きたいと言うので、テーマパークへいった。
女の子とのデートとしては定番で外れがなかったことと、奈緒美もいきたいといったからだ。
晴彦が車で連れて行ったのだが、現れた奈緒美の姿を見て目を見張った。
実年齢よりも十歳以上も若く見えたからだ。

ミニスカート姿といい、まだ二十代でも通りそうだった。
これが美魔女というのかと、晴彦は思う。
本当に嬉しいのか、終始はしゃいでいた。
そんな奈緒美を見ていると、晴彦も相手が同級生の母親ではなく、恋人のように思えてくる。
若い女の子のように、身勝手な我が儘を言わないだけにむしろ好ましいほどだった。

テーマパークないでは色々な乗り物へ乗りたがった。
ジェットコースターやフリーホール。
大観覧車へも乗りたがった。
なぜか恐怖の館という、お化け屋敷へも一緒へ入った。
ただ困ったことは、晴彦の身体に自分の肉体を密着させてくることだった。
バストの大きさがはっきりと分かるほど、密着させられていた。
気もそぞろで乗り物所ではなくなっていた。

「――愉しいわッ。テンション上がってきちゃったァ。お礼に、帰るまでなら何でもしてあげるわよ」

　奈緒美はウインクしていった。
　わざとＨなサービスをしてあげるといっていた。

「この観覧車、一周するのに結構時間がかかるみたいよ」@

　なんとなく意味ありげな言葉だった。
　奈緒美の言うとおり、一周するのに時間がかかった。
　それくらい大きな観覧車だった。

　奈緒美はある程度上まで上がってしまうと、対面に座る晴彦にスカートをまくってみせた。
　何気なくではなく、はっきりと分かるようにである。
　下着はブルーのビキニタイプで、ガターベルトでストッキングを吊している。
　男の視線を意識した悩殺下着だった。

「デートだから、思い切った下着を着けてみたの……」

　晴彦は周りの景色を眺める余裕をなくしていた。
　その見ても良いわよという大胆な態度に度肝を抜かれた。
　なまじ年齢を感じさせない熟女なだけに扇情的だった。
　思わずまじまじと眺めてしまった。
　奈緒美は個室に入ると、躊躇いもなく淫らで大胆な行動をする。

「見られているんじゃないかと思うと、スリルがあるのねッ」

「―――！？」

奈緒美は二人になると、熟女の本性を露わにする。
刺激を求める貪欲な姿を。
晴彦はそんな奈緒美から眼がはなせなくなってしまった。

観覧車から降りると、奈緒美は晴彦の手を引いてトイレの個室へ連れ込んだ。
人気のないトイレを探して歩いた。
晴彦も抵抗はしなかった。

「……こ、ここで、なにを……？」

「黙っていて、大きな声を出さないで。聞こえちゃうでしょう……」

まるで痴女に襲われているような気分だった。
晴彦は壁に背中を押し付けるようにして、身体を支えた。
奈緒美は一度、晴彦の唇に自分の唇を重ねてから、そのまましゃがみ込んだ。
目の前に晴彦の股間がある。

「…あ、あ……」

奈緒美の指はズボンのジッパーを下ろしていった。
ズボンの中の分身は個室へ連れ込まれる前から硬く猛っていた。
指で掴み出す必要もなかった。
それくらい晴彦は興奮している。

「ズズ…、ム…フ…ンンン……ジュ、チュッ……」

奈緒美に躊躇いはなかった。
晴彦のペニスを、口の奥へと頬張るように飲み込んでいった。
食い付いてくる――そう思わせるほど大胆な行為だった。
晴彦は奈緒美の頬が膨れたり窄まったりする動きから目がはなせなかった。
奈緒美の頬が動く度に、頭が上下に動く度に強い快感が突き上げてきた。

「ウウ〜〜、ズズズッ……ジュルジュル…ム…ンン〜〜！」

「…あ…あ、あ……」

膝が震えた。
こんな経験したことがない。
女にトイレの個室に連れ込まれて、フェラチオされている。

それもとてもエロい美熟女に。
憧れていた女の子の母親にだ。

とても耐えられる官能ではなかった。
晴彦は大量のザーメンを奈緒美の口の中へぶちまけてしまった。
奈緒美は口の中へ射精されても、嫌そうにはしていなかった。
テッシュをとりだし、口の中のザーメンを吐き出してみせた。

「……フフフ、凄い量ね。やっぱり若いわね……」

奈緒美の顔が妖婦の顔に見えた。
高級娼婦と言われても、すんなりと信じられる。
これがあの女の子の母親なのかと思うと、またも股間が硬くなりかけてくる。

■選択。
・7 の新たな展開へ移動。

4　ドライブ。

晴彦は、奈緒美をドライブへ連れていくことにした。

車をまだもっていないので、レンタカーを借りた。
スポーツカーで颯爽とと言うわけにはいかなかったが……。
それでも目一杯、ドライブに良い車を選んだつもりだった。

待ち合わせ場所に現れた奈緒美は、まさに華やいだ雰囲気だった。
カジュアルなスーツを着て、ミスカートを履いていた。
若々しく、それでいて艶めかしいような格好だった。
なんとなく、誘われているような気がした。
無理して若作りしているのとは、次元が違う。
一美のファッションセンスは素晴らしいと、良くいわれていた。
そのファッションセンスは、母親の奈緒美譲りなのが良くわかった。

「どこへいきます。高速に入りましょうか……」

奈緒美は見晴らしがよいとこを走って欲しいといった。
とにかく、スピードを出せるところを走って欲しいといった。
そこで晴彦は高速に入ってしばらく走ることにした。
奈緒美はとても、嬉しそうだった。
どこかへ出かけられることが嬉しいのだといった。

考えてみれば、晴彦も女性を乗せて走るのは初めてだった。
女の子とドライブ――。
男にとっては、憬れのシチュエーション。
熟女といっても、美貌の女性だった。
少し気持ちがワクワクとした。
高速に入って、ノンストップで加速すると奈緒美は娘のようにはしゃいでいる。

「気持ちいいわ～～。こうやって走るのは何年ぶりかしら……」

助手席の奈緒美は、晴彦の太腿に手を乗せてきた。
もともと車に乗る前から、少しセクシーな装いでもあった。
車に乗ってからは、それがもろに剥き出しになった。
ミニスカートが丸見えになるように座っている。
はいているのは黒の網タイツだった。

それを晴彦が見えやすいように、足を組み替えたりしている。
あきらかに、男の視線を意識しての行為だった。
晴彦の視線は、チラチラと奈緒美の脚へ向けられていた。

「ウフフフ……。こんなオバサンの脚で良かったら、もっと見てくれてイイワよ……」

「え…そんな……」

奈緒美は自分の脚が男の目に晒されることが嬉しいようだった。
明るく話しながら、さらに脚を組み替えた。
スカートをわざと上にずらして見せている。
ショーツが少し、顔をのぞかせていた。
晴彦はどうして良いかわからなくなった。
股間の分身が、固く大きくなってきたからだ。

見ても良いといわれたからではないが、晴彦の視線はますます奈緒美の肉体へ吸い寄せられていく。
奈緒美は黒の網タイツを、ガーターベルトで吊っていたからだ。
顔は無邪気に笑っているが、やっていることはギャル以上の猥褻さだった。
表情と、車の外から見えない身体の動きは違っていた。

「ほら、もっとガールフレンドみたいに扱ってよ。若い女の子みたいに花はないかもしれないけど、その分ガードはすごく緩いんだからね…」

奈緒美は、晴彦の太腿の上に手を置いた。
晴彦の腿がピクリと反応した。
思わぬ展開に、欲望が滾りだす。
熟女の行為はますます大胆になっていく。
これが憧れ続けていたマドンナの母親なのかと思うと、興奮がおさまらなかった。
しばらくそんな調子でのドライブが続く。

「ウフフフ……。触っていいわよ。恋人のつもりで触ってくれていいから……」

晴彦の手を取って、自分の太腿へと誘導する。
その手を振り払ったり、拒否することはできなかった。
高速を降りて、ファミリーレストランへ入って食事をした。
奈緒美はいつもよりもはしゃいでいた。
まるで娘の一美と同じ年齢のように見える。
奈緒美が支払うというのをすべて断って、晴彦が払った。

「このまま帰るの――？　年上の女は、若い女の子と違うのよ……」

車に乗ると、奈緒美はいった。
ハンドルを握る晴彦の手が止る。

――――――。

■選択。
・5 のラブホテルへは行かないへ移動。
・6 のラブホテルへ行くへ移動。

■　ラスト　■

★　続きは製品版で――。　★